

作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名： 石上 直彦
(事業所) 安倍口作業所

役 職： 管理者

発表者名： 高橋 和彦
(事業所) 賀茂障害者就業
生活支援センターわ

役 職： 相談員

【発表事業所の概要】

事業区分	就業・生活支援センター
定員	
活動内容	障害を持った方の地域、生活を支えていく

【支援・活動対象者の概要】

性別	男性3名、女性1名
年齢	30代～40代
障害の種別・特性	知的障害

【支援・活動事例の概要】

目標・目的	過疎地域で社会資源の乏しい地域で様々なケースの障害者をどう福祉とつなげ、生活を構築していくのか
計画・手段	本人の意向を聞き、市町の障害福祉担当と相談し、利用できる社会資源を探し、また社会資源に乏しい圏域で不足する社会資源をどう補うのか話を進めていく
内容・経過	過疎地域であるため一つの法人で生活を丸抱えにしていくことが出来ないため、様々な関係機関と連携し、また時には限られた人が様々な役割を担いながら地域での生活をなんとか支えている

結果・課題	<p>〈結果〉</p> <p>不足する社会資源を補うため地域で暮らす方にも様々な役割を担っていただきながら、当事者の方の生活を支えている</p> <p>就業・生活支援センターが制度の隙間を埋める役割を担っている</p> <p>〈課題〉</p> <p>社会資源の乏しい地域では多くの障害を持った方が社会資源の不足で住み慣れた地を離れて暮らさなければならない。</p> <p>地域で関わる人、支援していく人をどう育てていくのかが難しい</p> <p>多くの人と顔が連ならないと支援が成り立ちにくい。</p>
-------	---

【意見交換】

(事例からテーマを抽出して)

「過疎地と都市部での社会資源の格差について参加者の居住地の状況を伺う。」

他の過疎地でも社会資源の乏しさから、遠方でのサービスを利用されている方、住み慣れた地から離れたグループホームでの生活を余儀なくされている方がいるといった具体例があり、障害者のニーズに対する社会資源の不足が顕著であった。

都市部では様々なサービスが利用できる一方で、近所付き合いが希薄で、過疎地でみられる町内会などご本人が長く生活されてきた中で培われた地域社会が社会資源とはなりにくい傾向であるといった意見があった。

「事業所間の連携について」

事業所毎、担当者毎で支援に対する考え方や意欲に差があるという意見が参加者から多く聞かれ、相違する部分についてどう連携していくのかが課題となっていると判明した。

【まとめ】

(テーマに対する分科会としての結論や方向性)

社会資源には地域格差があり過疎地では特に社会資源が不足傾向であるが、都市部でも都市部なりの課題がある。

障害者の支援については、事業者連携は事業者や担当者の熱意に差があり改善は容易ではないが、そもそも福祉の原点に立ち返れば、授産所と言われた時代は、各作業所が発表者の高橋さんのように、障害を持った方のニーズについて「なんでもやる」というのが自然であった。

昨今様々なサービスが出来たことでお金になる・ならないが作業所がやること・やらないこととなりつつあり、また仮に既存のサービスだけで障害者の支援を賄おうとすればどうしても隙間が出来てしまうが、今回その隙間を埋める役割を担っている高橋さんの事例を通して、障害のある方を支えるとは何か？福祉とは何かをもう一度考え直すいい機会となった。

一方で、やはり障害者を地域で支えていくためには多様なケースに対応するためには個人の力だけでは限界もあるので、人材育成と事業者連携、地域連携を深めていくことはやはり重要であるというまとめとなった。